

現代の子育て支援の専門性

The Modern Professional Support For Child Care

寺 井 弘 実

Hiromi Terai

〈要旨〉

便利な育児用品が豊富にあり、かつ、育児情報量が多量に流れる現代社会での「子育て」は、ややもすると「子どもの要求」を無視し、養育する者の便利さに流されてしまいがちである。その結果として「子どものこころの育ち」を脆弱にしてしまいがちである。

子どもに関わる職種者が「子どものこころはどのような過程を経て大人に育つのか」を明確に認識することで、子どもとの直接的関わりだけに留まらず、養育者への具体的な支援をも創造していけると考える。

本稿では、乳幼児期・学童期・思春期とそれぞれの発達段階に生じてくる問題行動の事例（遊びの偏り・乱暴な行為・不登校・自傷行為・など）を通して見えてくる「子どもの苦悩・親の苦悩」を考察し、「子どものこころの問題を発生させないために乳幼児期に何を育てるか」を明らかにしながら、「今求められる子育て支援の専門性」とは何かを示唆する。

〈キーワード〉

子育て支援の専門性、こころの育ち、発達障害、問題行動

1 はじめに

現在までに「少子化対策」と称していくつかの施策がとられたが、現実には「少子化」の流れは止まらない。「1～2人の子どもを丁寧に育てる」というポリシーが子育て世代には定着し始めたといえる。しかしながら、「初めての乳幼児とのふれあい」が「わが子」である多くの母親・父親にとっては、「子育て」は全てにおいて初めての体験であるゆえに、とまどうことが多いのが現実である。「上手く育てたい」という思いをもちながらも、子どもとの関係を上手くもてないままに養育を続けていった故に生じた相談事例が多くなった。また「発達障害の問題を抱えた子どもの養育に疲労する親の支援」をいま一度見直して必要性があると感じている。

今求められる「子育て支援の専門性」を考察する。

2 子育てにとまどう親たちの事例

①育児サークルでのトラブルに疲れた母親と子ども

相談主訴 幼稚園6歳の長男が同性の男児を遊ばず女児とばかり遊ぶ。なにかこの子に障害があるのか？

母親の話を聴いていくと〈「育児サークル」に参加して子

ども同士で遊ばせないと子どもの成長にマイナスである〉という強い観念にしばられている若い母親たちの思い込みがみえてくる。0歳から育児サークルに参加して、そこで同じ年齢の男児と母親同士も友だちになる。しかし、その場でいつも長男はその男児に理由もなく押されたり、髪を引っ張られたり、けられたりの被害を受けていたとのこと。母親同士の仲がこじれることを恐れて、その男児を強く注意できないまま、いつもわが子は泣いていた事実が語られる。やがて同じ幼稚園に入園し、この関係はさらに3年間続き、就学を迎えるにあたって今回の相談となった。「何故もっと早く、わが子をその男児から引き離さなかったか？」と尋ねると、母親は「保健所がすすめた育児サークルから離れることは不安でした。それに、子どもは集団のなかにいないと育たないと思っていました」と返答した。

*1 歳頃から理由もなく同姓の同じ年齢児から殴られたりする体験を繰り返し重ねることは同じ対象に対して恐怖感を抱かせる。気質としてあまり攻撃性をもたない子どもが乳幼児期に怖い体験を重ねないように養育者は配慮しなくてはならない。「何故その子に殴り返さないの？」と問うた母親に、彼は「僕は友達を殴ったりすることはしたくない」と答えている。

【子どものころを育てるためには、その子にあわせた環境を考慮すること・育児サークルという〈社会的な集団〉に幼児期から参加しなくてはいけないということにしばらくは、わが子を障害の観点からみるのではなく、“集団で安心して遊べる体験が乏しい子”と視点を変えてとらえ、今は、むしろ女兒との安心感のある遊びを容認し、無理に男児の中に入れようとしなくてください。まず安心して集団のなかで遊ぶ体験が必要です】と伝えた。

「0歳から3歳までの心の育ち」に一番影響を与えるのは、「集団」ではなく「子どもと生活をともにする大人」であることを認識することは重要です。

②「しつけが悪い」と回りから非難され悩む母親

相談主訴 幼稚園に通う5歳の長女がクラスの友だちを押したり、顔を傷つけたりする。実は以前通っていた別の幼稚園でも同様なことがあり回りの父兄から「しつけが悪い親」と非難され転園してきた。親として注意しているが治らない。どうして育てたらよいか悩んでいる。

出生時からの生育歴を聞き取ると「新生児から泣き止まず母親が疲労して祖母に手助けをもとめたこと」「言葉の始めは2歳ごろで普通であったが、話が一方的で会話になりづかったこと」「こだわりが激しくて、今も洋服は幼稚園の制服しか着ず、寝るときも制服を着て寝ていること」「友だちを叩いたときは叱っているが、その場ではわかったと言うが、すぐに何事もなかったように遊びだすこと」などのエピソードが母親から語られた。

【子どもの問題行動を「親のしつけが悪いから」と結論づけてしまうと、何故か納得してしまいがちである。たしかに、「しつけ」がなされていないがゆえにおきてくる問題行動もある。しかし、「しつけをしにくい子ども」はいる。発達障害を抱える子どもであり、とくに知的に遅れがないアスペルガー症候群といわれる子どもに対する「しつけ」は困難である。“非常に強いこだわり”をもつために、「しつけ」をしようとしても受け入れずに泣き叫び、結局、親が諦めて従わずにおれなくなる。このような場合は「しつけのできない親」と非難していても何も変わらず、むしろ、親が孤立していく結果となる。「発達の偏りを抱えている子ども」にも伝わる方法を親と一緒に考えてくれる専門家が傍に存在することが必要となる。

この相談例でも、来所した母親は決して養育を放棄してきたわけではなく、「ごく普通にしつけ」をしてきていた。
〈母親に対して伝えたこと〉

子どもの問題行動は「親のしつけの問題」ではないので、自分を責めないこと。しかし、その子に合った「しつけ」のやり方を探していかななくてはいけないので、一緒に考えていく必要があること。あわせて、専門機関を受診して診断をもらうことの必要性を伝えた。

〈幼稚園に対して伝えたこと〉

幼稚園の職員全員で彼女と親の新たな理解をして欲しい。発達障害〈アスペルガー症候群〉の観点から「意地悪で乱暴な子ども・しつけのできない親」との理解を改めて、「周りの状況や相手の気持ち察知することが苦手で、自分の思いだけで行動してしまうので、その場その場で丁寧に教えていくことが必要である・こだわりはある程度は認めてパニックを減らしてやること・親の子育ての苦悩を職員が聴いてあげること」を伝えた。診断にこだわることはしないで、その子の特徴の理解を深めてほしいとお願いした。また、できるなら、職員の加配をもお願いした。

☆子どもと親を取り囲む環境が変化する＝【周囲の人の親と子どもへのまなざしの変化】だけでも「子どもがおこす問題行動」は減っていくものである。

③親からの不適切な養育をうけてきた母親の養育不安

相談主訴 1歳半健診で「言葉の遅れ」を指摘されて、「お母さん、もう少し子どもさんと遊んでくださいね。話かけてください」と指導されたが、「子どもとどの様に遊んだらよいか？何を話しかけたらよいか？」がわかりません。教えてください。

3歳5歳で初出産をした母親は真剣に聞いてきた。「子どもと楽しく遊ぶということがとても理解できません。言葉を理解していない子どもに話しかけて何の意味があるのですか？」と質問をする。

子育て、とくに乳幼児の子育ては「親自身の受けた養育体験が強く影響する」といわれている。国際的な「愛着理論」の研究は、厳しく突き放されて育てられた子は、突き放す親になりやすく、虐待されて育った子は虐待しやすい親になり、暖かく寛大に認められて育った人は包容力のある親になりやすいという結果を示している。これを「愛着パターンの世代間伝達」という。しかし、ここで重要なことは、この世代間伝達は決定的ではなく親自身が自分のつらい養育体験を感情をこめてふりかえり内省することができる、わが子に葛藤を伝達しないですむといわれていることである。親自身が受けた心の傷や親子関係の葛藤を誰かにしっかりと聴いてもらう体験をすることで心に深く抑

圧された苦しみが和らいでいくのだ。母親はカウンセリングの過程のなかで自分の生育歴を含めて子育ての思いを以下のように語っている。

『実は私は子どもが嫌いでした。出産後、オムツを替えたり、ミルクを飲ませたりして身体は大きくしました。けれど、嫌いな子どもに何を話しかけたら良いかわからず困りました。泣き声にイライラして叩いたこともありました。子どもという楽しいと思ったことはありませんでした。私は子どものころによく親から些細なことで殴られました。本当に些細なことで。自分の親がそうだったのでそんなものかと思いきや子どもに手をあげていました。子どもの表情の乏しさも私との関係のなかで生じていたのですね。私も笑顔がありませんでした。いつもイライラしていました。おかしいことを繰り返してはだめなんですね』

と話され、以後は積極的に遊びの広場に参加されて、保育士から「手遊び」や「身体を使っの親子遊び」を楽しん覚えていくようになり、親子の笑顔がみるみる増えていった。

☆世代間伝達は断ち切ることができることをこの母親は教えてくれている。米国の乳幼児のこころの発達研究家のスターンは〈情動調律〉という概念で「母親と子どものこころの波長の合わせの大切さ」を説明している。

④担任の話を聞けずに注意を受け続ける年長児

相談例 離婚して実家に子どもをつれて戻ってきた娘が養育をしないで困っている。保育園の送迎から日常の世話を全て自分たち祖父母がしている。娘は仕事は非常に真面目にしている。娘に怒りをおぼえ喧嘩が絶えない。2歳から育てて今、孫は6歳になったが、保育園で落ち着きがないといわれた。祖父母として何をすればよいのか？

実の娘が離婚をし子どもとともに実家に戻り生活するというパターンが珍しくない時代になった。しかし、いつの時代であっても離婚するということは精神的な傷を受ける。話を聞いていくとこの母親にとっては納得がいかない離婚であり、別れた相手に対する気持ちがまだ残っており、母親は自分の葛藤で一杯で、“子どもを養育する”という気持ちになれずにいた精神状況が明らかになってきた。そして、仕事でその葛藤を紛らわしていたようだ。

〈祖父母に対して伝えたこと〉

まず、しなくてはいけないことは、何よりもこの母親が精神的に元気になるにはどうしたらよいかという視点から考えていくことの大切さ。そして、そのためには、娘である母親を「どうしてわが子を育てないのか」「母親として無責任である」などと言葉で責める気持ちをすてること。この気持ちがある限り「祖父母と母親との喧嘩」はなくなることはないこと。そしてこの「喧嘩」こそが母親から養育しようとする気持ちを奪うことになる。と伝えた。

社会的な仕事を責任をもって行える力をもつ母親〈祖父母の娘〉は「自分の状態を内省できる力を潜在的に持っている人」であるから、今はこころが傷ついた娘が癒えるまで気持ちよく力になっていただきたいとお願ひした。必ず、わが子に関心が向き、養育しようとする気持ちになる母親になるとも伝えた。

母親が子どもを誘い二人でコンビニに買い物に行くときの嬉しそうな孫の表情も祖父母から語られ、そんなときには母親を褒めてあげてくださいともお願ひした。

〈保育園に対して伝えたこと〉

6歳児としてできて欲しいことはあるので、本児だけに特別に注意しないということは不自然である。「いまは先生のお話をきいてね。座ってね」ときちんと伝えて欲しい。しかし、なぜ、こんなに落ち着かず、先生の話が聞けないか？と考えたとき、明らかに育ちの問題にいきつく。エリクソンのいう「1歳から3歳までの発達段階—自律性の獲得に失敗している」と見立てる。この「自律性の獲得」は「1対1」の人間との関わりを通して獲得される。「自分だけを見てほしい時期」である。この欲求がまだ本児には満たされていないと理解して、個別に話しかける時間を毎日必ず確保してほしい。

☆子どもの問題を考えるときは「家庭」と「保育園」との連携は重要であるが、「保育園側」が「家庭」のなかの問題まで踏み込むことには躊躇が生じる。そんなときは外部の相談機関の力を借りて調整をすることも方法である。

⑤ 不登校—小学校2年生から突然に不登校

相談例 私は小学校の教師です。

小学校1年の時担任をしていたA君が2年生の4月から不登校になっている。とても素直に担任の話を聞いて、宿題も忘れてきたことがない。クラスのリーダー的存在でした。両親もしっかりとした方です。何故不登校になったのか疑問です。一緒に考えてください。

「大人にとって育てやすい子ども」とは、実は「大人の要求を察知して行動している子ども」と言い換えてもよいかもしれない。

子ども自身の素直な感情を表現することを辞めて、常に周りの要求に沿って行動している子どものことである。そこに、この相談のポイントがある。

そこで、母親が行った「1歳から始めた排泄の自立のやりかた」を教えてもらった。

母親はわが子が排泄に失敗することが許せず、失敗すると厳しく叱ったり、お尻を叩いてしつけたとのこと。父親もまた失敗が許せず、母親以上に厳しく叱った。

☆幼児の排泄の問題は心理的な関わりを強くもち、この失敗が子どもの不安と結びついている場合がある。

この相談例はまさに排泄に絡む問題が潜んでいる。

排泄やその他の身辺自立の獲得のためには、自分でもって試行錯誤したがるし、またその必要性があるのに、その「試行錯誤の体験」を奪われてしまったために生じた心理的問題。この子どもは「失敗することが許されなかった」ために「失敗すること」を恐れるようになり、不安感が募ったと思われる。大人に叱られないように、失敗しないようにと、常に大人〈親・保育士・教師〉の要求に応じて生活してきたことが想像でき、彼はもう疲れはて登校エネルギーが無くなったと考えられる。

母親には、生活のなかで彼に指示することをできるだけ少なくして「本人の気持ちから生じる行為」が出てくるように関わってもらおうようお願いした。周りの要求に応じた気持ちではなく、本人の生の感情を表出することができるようになり、それに対して褒められる体験が必要である。少し時間がかかるかもしれないが、発達課題の取り戻しは可能であることを伝え、母親を励ました。

発達課題の取り戻しはいつからでも可能である。

3 子どもが語る「親の養育法」

子どもたちは思春期を迎えると、自分の心の問題を自分の言葉で語れるようになり、その子どもたちの心のことを聴いていると、親の存在の大きさが伝わる。そして、親として、大人としてなにが大切なのかを教えてくれる。

① 同居している祖母が亡くなったことを契機に不登校になった中学2年生が語る母親への思い

〈家族は両親と3人きょうだい。本人が長女で下に弟と妹がいる。父方の祖父母と同居してきた〉

『亡くなった祖母は私のことをとても可愛がってくれたので亡くなってしまいとても寂しいです。でも、祖母が亡く

なったから登校できなくなったのではないと思っています。私は幼いときから祖母の部屋で寝ていました。本当は母親と寝たかったです。母親と寝ている妹や弟がうらやましいと思ったこともありました。けれども、私が祖母の部屋に行くと母親が嬉しそうにすることに気づいてからは諦めました。小学生になる頃には、母と祖母の仲が悪いということもわかるようになり、一層母親の傍にいけなくなりました。祖母といることが母親に認めてもらえることのように思えました。今、祖母が亡くなり、私は誰のそばにいたらよいかわからなくなりとても不安です。自分から母親のそばに行く勇気がありません。何故か距離を感じてしまうのです。こんな不安な気持ちの状態では登校できません』

母親とのカウンセリングのなかで、私は「娘の母親への気持ち」を含めて伝えました。

【思春期という情緒的に不安定な時期に、今まで支えてくれた祖母を失い、娘は非常に不安に感じていること。そして、こころの奥深いところで母親との関係の弱さにずっと寂しい思いをしてきたこと。今もう一度母親と娘との関係をつくり直すことが必要であり、そのためには、母親の方から働きかけることが大切であること。日常生活のなかで一緒に買い物に誘ったり、話したり、するのめ方法であること】

母親は理解してくださり、「以前から娘の問題は私の問題ではないかと思っていました。私と姑との関係がこじれるのをあの子が救ってくれていたのかもしれない。もう一度娘との関係を作り直してみます」と話してくれた。

② 母親が嫌いといいながら、母親の言葉に動揺してリストカットを繰り返す19歳の女性が語る母親像

『私の母親は私が5歳のときに離婚して兄と私の2人を育ててくれました。父親は経済的には力があるので養育費と今住んでいる家を渡してくれていますから、お金に困ることはありません。兄は私立大学で下宿しています。私は現在地元の短大に通っています。私のリストカットが始まったのは高校3年生からです。母は私に有名大学に行って欲しかったのですが、段々と成績が落ちてきて母が望む大学には合格できないとわかるようになってからです。イライラして眠れなくなり、リストカットをすると妙に落ち着きました。両腕は傷だらけです。母親に見つかったとき母親は「その傷を私に見せないで！その傷は私に“自分の子育てが間違っていた”と突きつける印だから」と言われました。なんだかとても寂しく思いました。私は母が大好きです。母の期待に沿いたい自分がいます。でも期待に応えられない自分がいるのです。リストカットは母へのあてつけ

ではありません。母に本当は甘えて言いたいことがあります。愚痴りたいこともあります。それが言えないのです。嫌われたくありませんから。今就職の時期を迎えて社会に出ることと、母の期待に応えられる職場に就けるかが不安でリストカットをしてしまいます』

彼女とのカウンセリングの過程のなかで私は「母親に愛されたい子どもの気持ち」を強く感じ取り、そして「母親に愛されるために自分の素直な感情を抑圧してきた苦しみ」から逃れるためにリストカットをする彼女の気持ちが伝わってきた。

【母親に対してのマイナスの感情がわいてきたら、母親には直接言わないで私に話してほしいこと。そして、リストカットだけは避けて欲しいことを約束しました。どんな年齢になっても無条件に母親に愛されているという実感は生きる力になるのです。その感覚は実は0歳の時に獲得する感覚なのです。この母親はこの時期には夫婦の問題が大きく、子どもを抱えこむ気持ちの余裕がなかったのかもしれませんが。母親の人生をも関係して子どもの問題はあらわれるものなのだ】

4 今求められる「子育て支援の専門性」

泣きながら相談の場所に現れた28歳の母親は『1歳10ヶ月になるわが子が落ち着きがないので「注意欠陥多動症」ではないかと不安でたまらない』と話始めた。

1歳児の幼児が落ち着いて物事に取り組むことのほうがおかしいとは思えない時代になった。詳しく聞いて行くと1歳半から英語の幼児教室にも通っていたとのこと。発達障害の情報が飛び、早期教育の大切さが叫ばれる時代の中での子育ての不安を感じ取る相談である。

「子育て支援の専門性」とはなにかと問われるならば相談を受ける者として、私は以下のことの専門性の要素が必要と考える。

1、ライフサイクルからの精神発達理論を学ぶこと

自分の納得する理論をみつけることである。私は「エリクソンの精神発達理論」を学ぶことにより、臨床場面で相談者の話をより深く聴けるようになった。エリクソンは「個人の成長・発達をライフサイクルの観点から把握し、そのうえで、自我の統合的機能や成長過程での自我が家族・社会的場面のなかで発達していく」という社会的・文化的現実を考慮した発達観である。

また、人間の生涯をⅧ階層に区分して、第Ⅰの階層から第Ⅱの階層へ、さらに第Ⅲの階層へというように、順序に従

って生涯の終わるまで、漸成的に発達が進んでいくという考えに立つ。

前章〔2-5 不登校—小学2年生から不登校〕はエリクソンの「第Ⅱ段階 自律性の獲得」の失敗から生じてきていると見立てて面接を組み立てています。

2、特に乳幼児期の発達に関する学説を学ぶこと

ライフサイクルからの視点とは別に「乳幼児期」に関しての発達理論を学ぶことは不可欠である。そこには、必ず「育てるもの」の存在がある。

① ウィニコットの「自我と対象関係の発達理論」

「独立した赤ん坊はいない。いるのは母親と赤ん坊という対になった存在である」「抱かれている赤ん坊が母親を見ているとき、その赤ん坊は母親を見ているだけではなく、母親の目に写っている自分自身をみているのだ」といった彼の有名な記述にあるように、ウィニコットは人間の出発点を常に個体(赤ん坊)と環境(母親)とのユニットでとらえ、特にその環境側の機能や両者の関係性に注目した。

② マーラーの「分離・個体化過程」

0歳から3歳までの乳幼児期の脳の発達によって生じる運動、感覚、認知能力の発達(個体化)とそれにより母親から離れて行動できるようになる体験(分離)の2つが相互に関係し合いながらこころは発達すると考えた。

【Ⅰ】 分離・個体化の前駆段階

- 1、正常な自閉期 0～1ヶ月
- 2、正常な共生期 1～6ヶ月

【Ⅱ】 分離・個体化の過程

- 1、分化期 6～10ヶ月
- 2、練習期 10～16ヶ月
- 3、再接近期 16～25ヶ月
- 4、個体化の確立と情緒的対象恒常性の出現

この理論は人生早期3年間の母子関係を中核に置く発達理論である。

事例③はこの理論を含んでいる。

3、発達障害の基本的な知識を学ぶこと

現代の親が得る情報は迅速である。相談する親側から「わが子はアスペルガーではないですか?」「ADHDではないですか?」「自閉症でしょうか?」と問われることも多くなった。子どもの発達の状態をしっかりと見極める知識

が求められる時代である。子どもの問題行動が養育からくるのか？発達障害からくるのか？あるいは重複しているのか？それにより、支援の方向性は異なってくる。

最近「わが子が発達障害である」と診断してもらい「自分の養育のしんどさ」から逃れたいと願う親が増えたように思う。「わが子の問題行動は障害のせいなのだ」と諦めようとしているようにみえる。わが子を親の力のみで育てることは容易ではない。日本の社会が「若い親が主たる養育者になる」歴史は 50 年ほど前に始まったに過ぎない。しっかりとした発達障害の知識をもって相談を受けて、若い親の支えになっていきたいものだ。②はその例である。

4. カウンセリング技術を獲得すること

人の話をしっかりと聴くことは難しいことである。「相手の話を聴く」とは「相談者の気持ちを、共感しつつまずその在り方を受け入れること」が大切であり、それができると相談者は安心して話すことができる。しかしながら、カウンセリング技術を高めるには「相手の話を聴こう」というだけではだめで、「聴こう」ということから始めて、次に「人間を理解するための理論・知識」を増やさなければ

いけない。人格心理学・発達心理学・精神分析など人間の見方についての勉強、そして、大事なことはその知識が自分の相談体験に裏づけられていかなければならない。

自分の関わった相談事例をスーパーバイザーに見てもらうことはぜひ必要である。

5. 現代の社会情勢を含む養育環境に対する積極的関心
社会情勢の変化は驚くばかりである。支援する者にとって、「今の時代のなかでの子育てを支援する」という意識は重要である。「女性の働き方に対する意識」「夫婦のあり方の変化」「子どもを取り囲む社会状況や経済情勢」などにたいしてのアンテナは敏感になっておくべきである。決して、自分が育った時代の感覚のままに「子育て」を見立ててはいけない。

しかしながらも、「生まれて育つ子どものころ」が求めているものは変わらないことも事実であると考えている。「安心した人との関わりを通しての育ち」である。時代とともに「変わるもの」「変わらないもの」を認識しながら、「子育て支援」を行いたい。

参考文献

- 1) 妙木浩之編：ウィニコットの世界〔現代のエスプリ〕別冊
至文堂 2004
- 2) 渡辺久子：母子臨床と世代間伝達，金剛出版，2000
- 3) 服部祥子：生涯人間発達論，医学書院，2000
- 4) 河合隼雄：カウンセリングの実際問題，1970
- 5) エリク・H・エリクソン〈小此木啓吾訳〉：自我同一性
誠心書房 1973
- 6) 吉田友子：高機能・アスペルガー症候群
「その子らしさ」を生かす子育て
中央法規，2003
- 7) マーラー〈高橋・織田・浜畑訳〉：乳幼児の心理的誕生
―母子共生と個体化―黎明書房，1981
- 8) 小林隆児：自閉症の関係障害臨床
―母と子のあいだを治療する―
ミネルヴァ書房，2000
- 9) 田中千穂子：乳幼児心理臨床の世界
―心の援助専門家のために―山王出版，1997